

## イエスの原像：「マルコによる福音書」の 批判的読解(3)

TAKAO, Toshikazu / 高尾, 利数

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / 社会労働研究

(巻 / Volume)

40

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

1994-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006517>

# イエスの原像

——『マルコによる福音書』の批判的読解—— (三)

高尾利数

## 8 イエスに従うとは？

『マルコによる福音書』三・七〜一九

7 イエスたちは弟子たちと共に湖の方へ立ち去られた。ガリラヤから来たおびただしい群集が従った。また、ユダヤ、8 エルサエム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺りからもおびただしい群集が、イエスのしておられることを残らず聞いて、そばに集まって来た。9 そこで、イエスは弟子たちに子舟を用意してほしいと言われた。群集に押しつぶされないうちである。10 イエスが多くの病人をいやされたので、病気に悩む人たちが皆、イエスに触れようとして、そばに押し寄せたからであった。11 汚れた霊どもは、イエスを見るとひれ伏して、「あなたは神の子だ」と叫んだ。12 イエスは、自分のことを言いふらさないようにと霊どもを厳しく戒められた。

13 イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。14 そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。

16 こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた。17ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、すなわち「雷の子ら」という名を付けられた。アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。

まず最初の七節には、イエスが弟子たちとともに湖の方へ立ち去ったときに、ガリラヤから来たおびただしい群衆が、イエスに従っていったとある。マルコは、明らかにこの「従う」という言葉を、ガリラヤからの群衆についてだけ用いて強調している。というのは、八節では、ガリラヤ以外の多くの所からの群衆の場合には、ただ「集まって来た」と語られるからである。イエスは、これらの群衆に「押しつぶされないために」、小舟を用意しなければならぬいほどであった。彼らは、それほどの勢いでイエスに押し寄せたのである。だが、マルコはなぜ、ガリラヤからの群衆と、他の場所からの群衆を区別したのかは、ここで見るかぎりでは明らかではない。しかし、ただ「集まって来た」というのと、イエスに「従った」というのでは、根本的な違いがあるのだと暗示しているように思える。ガリラヤは、当時のパレスティナに生きていたユダヤ人の間では、いわば「辺境の地」とされていたのであり、「地の民」と呼ばれた貧しいユダヤ人たちや多くの異邦人たちが住んでいたし、「ガリラヤから何か良いものが出て来るであろうか」などと蔑まれていた所であった。そのガリラヤからの民衆は、イエスに従って、行こうとしていた。

九節は、原文通りに訳せば、「イエスは弟子たちに、群衆のゆえに、舟を側近くに用意するように言った。彼らが彼の上に押しつかからないためであった」となる。「小舟を用意してほしい」というのとは、かなりニュアンスが違う。つまり、本来もつと切迫した空気が感じられる状況だったのである。一〇節でも群衆は、「イエスに触れようとして、

彼の上に押し寄せた」とある。ガリラヤからの群衆が、すでにイエスに従っていたのだが、その後から、他の諸地方からおびただしい群衆が押し寄せてきた、というイメージである。この状況は、二つの方向にイメージできる。一つは、ガリラヤを始め、多くの所にこれほど多くの人々があらゆる病に苦しめられていたことを強調するという方向である。当時の状況が、一般の群衆にとって、どれほど抑圧的であったかを彷彿とさせるイメージである。もう一つは、ガリラヤからの群衆も、最初は他の地方からの群衆と同様に、ただイエスによって癒されることだけを望んで押し寄せたのかもしれないが、今はイエスに従っている、ということ強調しようとする方向である。彼らはガリラヤから来て、イエスによつてすでに癒された。だがイエスの側から離れようとはせず、彼に従っていた。ということは、彼らのなかにはすでに、ただ病気を癒されたいというだけの動機ではなく、イエスに従つて行きたいという願いが生じていたということを示唆する。それは、病気を癒しということを紹介して彼らに自覚されるようになったイエスとの何か深い交流の経験であったかもしれない。イエスと共にいることに彼らが感得し始めた魂の交流というようなものであったかもしれない。だが、その後他の諸地方から来た群衆は、イエスの上に押し掛かろうとして、ひよつとしたらイエスを「押しつぶす」ことになるかもしれないほどの勢いである。ここには、イエスに従うという意図は見られず、いわば彼らの剥きだしのエゴイスタックな願望がたぎり立っている。彼らにとつては、イエスが何者であろうが、そんなことはどうでもよく、とにかく病気を癒してもらうことだけを欲して、我先勝ちにイエスに押し寄せているのである。その彼らの凄まじい願望は、イエスを「押しつぶす」かもしれないほどである。こうした動機に動かされている群衆は、イエスに従おうとするのではなく、いわばイエスからの御利益を受けようとするだけなのであり、それゆえ御利益が感じられなくなれば、ただちに離反するような「押し寄せ」である。それは、状況が変われば、まさにイエスを殺すかもしれない方向である。

さて、このテキストにおいては、イエスが、これらの人々の病を癒したということが語られていないのに気付く。なぜマルコは、「そして、これらの群衆がみな癒された」というような言葉を付け加えなかったのであろうか。むしろ、このイメージとしては、逆にイエスが、こういう群衆から逃れようとしているかに見える。

そのうえすぐ後の一一節では、突如として「汚れた霊ども」が言及される。「汚れた霊どもは、イエスを見るとひれ伏して、『あなたは神の子だ』と叫んだ」とある。そしてイエスは、「自分のことを頭にあたまにしてはならないと大いに叱った」（一二節）と結ばれているのである。あたかもマルコは、ガリラヤ以外の所から来た群衆たちが、「汚れた霊ども」だと暗示しているかのようなのである。この「叱る」というマルコ独特の用語については、すでに何回も説明した。それは、一・一五でも、五・七でも、そして八・二九、三〇、三三でもそうであるように、いつも悪霊や悪魔を叱るときに用いられる特殊な用語である。悪霊や悪魔は、人間よりも鋭く、イエスのことを「神の子」「神の聖者」などと認識するが、イエスと魂の交流を持つなどとはもちろん思わない。だから、彼らがイエスを「神の子」などと称えても、そこには魂の交流など起こらず、それゆえイエスと共に生き、イエスに従うというような健全な願望も起こらず、逆に彼らの「本性」が頭にされ、結局追放されることになるのだ。だから、イエスとの深い魂の交流なしにイエスを「神の子」だの「神の聖者」などと「告白」するのは、むしろ悪魔的なことなのだ。本当にイエスの人格の深い核に触れることもなく、イエスの意図や思いを理解することもなく、自分だけが「救われたい」「偉くなりたい」などというエゴイスタイックな欲を中心に、イエスに「迫って」来ても、本当の癒しは起こらないのだ。マルコは、こんなことを暗示したのであろうか。

さて『マタイによる福音書』の並行記事（一二・一五〜二一）を見ると、マルコとの違いを再度確認させられる。

そこでは、マルコに見られた「ガリラヤ」を強調する視点はまったく欠落してしまっている。ただ「大勢の群衆が従った」とあるだけで、実に平板である。そして主眼はイエスによる癒しを、イザヤの預言の成就として語り、イエスを神の「選んだ者」、神の「心に適った愛する者」、神の「僕」、<sup>しもべ</sup>「勝利に導く者」、「異邦人も彼の名に望みをかける」者として描き、キリスト論的に賛美するという方向を示すことである。だからこそ、マルコで、イエスを「神の子」と呼んだ汚れた霊に関する記事が、完全に抹消されてしまっているのである。マタイには、マルコの意図が理解できなかったのではあるまいか。マタイは、悪霊がイエスのことを「神の子」などと呼ぶのを許せなかったのかもしれない。

『ルカによる福音書』の並行記事（六・一七〜一九）では、マタイと同様、マルコのガリラヤを強調する視点は、意識されもしない。ただ、あらゆる地方から病気を治してもらうために「おびたらしい民衆が……来た」と述べるだけである。そして、「汚れた霊に悩まされていた人々も癒していただいた」と平板に付け加えているだけである。マルコでの「従う」と「来る」の違い、汚れた霊がイエスを「神の子」と呼ぶことの問題性などは、まったく理解されていない。

こうしてみると、いわゆる「共観福音書」と呼ばれているこれらの書物間の根本的違いに、今更のように驚くほかない。とても「共観」とも「共感」とも表現できるものではないのである。

さて、マルコにおいては、この記事に続いてすぐ、一二人の「使徒」が選ばれるくだりが来る。まずイエスは、「自分自身が欲した者たちを呼び寄せる（現在形）」とある。日本聖書協会の口語訳では、「みこころにかなった者た

ち」とされ、新共同訳では「これと思う人々」となっているが、やはり端的に「自分自身が欲した者たち」と訳すべきであろう。原文では、「彼（イエス）が」が強調されるのであるから、「彼自身が」と強調して訳すほうがいい。つまりここでは、イエスが自分で主体的に彼らを選んだということが強調されているのだ。しかも、「呼び寄せる」が現在形になっていることも重要であろう。すぐ後では、「彼らが彼のところにやって来た」と過去形が使われているのであるから、この現在形には特別の意味が込められていると読むべきであろう。マルコは、イエスが「呼び寄せる」という行為を常に現在のこととして把握しようとしているのだ、といえようか。

一四〜一五節は、文字通りには、「彼は二人を作った。彼らが彼と共にいるように、そして彼らを宣教するため、また悪霊を追い出す権威を持たせ、送り出すために」である。彼らを「任命した」とか「立てた」というのは、大袈裟すぎる感じである。一三節の「使徒と名付けられた」という部分は、多くの写本にない。定評あるネストレー版にもない。マルコでは、「使徒」（アポストロイ）という表現は、六・三〇で一回使われるだけであるし、その場合には、文字通り「送り出された者たち」（「送り出す、派遣する」という意味の動詞アポステローに由来）という意味である。それゆえ、マルコの意図は、弟子たちがここで、後代の教会が威厳をもって用いた「使徒」として任命されたということに力点があるのではなく、後に「使徒」と呼ばれるようになった二人の弟子たちが選ばれた本来の目的を強調することであつたであろう。

さて、弟子たちが「イエスと共にいる」というのは、生、前のイエスと共にいるということであり、イエスをキリスト論的に「唯一のメシア・キリスト」と信じることではない。そうではなく、「イエスと共に、イエスのように生きる」ことが目的なのである。それは、一・三七でイエスが「みんなで行つて……宣教しよう」と言うように、イエスのみに限定される業ではなく、弟子たちにも分与される共同の業なのである。ここでも、言葉を宣べ伝えることが、

言語的に説明されるのではなく、悪霊を追い出す行為として述べられていることが重要である。だからこそ、「イエスと共にいる」ことと、「送り出す」という一見矛盾するような二つのことが、併記されているのであろう。つまり、「イエスと共にいる」ことは、「イエスに従う」ことに繋ががあるのであり、それは「送り出されて」、「イエスのように行動する」ことなのである。

これとの関連で興味深いのは、マタイにおける弟子の権威についての展開である。次のような記事がある。

すると、ペトロがイエスに言った。「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、わたしたちは何をいただけでしようか。」イエスは一同に言われた。「はつきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも、わたしに従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる」。(一九：二七～二八) (『ルカによる福音書』二二：三〇参照)

また『マタイによる福音書』には、ペトロが教会の礎石として立てられ、「天国の鍵」を授けられるという記事がある(一六：一六以下)。どちらにしても、マルコの理解と何と違ってしまうことであらうか。

われわれが、イエスと共に追いつくことを委ねられている悪霊とは、現代の世界においては、どのようにイメージされるであろうか。すでに他のところでいろいろ述べたのでここでは繰り返さないが、一つ思いつくことがある。それは、かつて梅本克己という哲学者が『現代思想入門』という本のなかで展開した考えである。彼は、原罪の問題を

論じながら、「現在の原罪」とは何かを追究し、それを「私的所有」と扱えた。その場合、「私的所有」とは、単に物質的な事柄ではなく、幻想としての自我への固執、他者を排除し他者から奪うという意味での自己中心性、自己正当化、他者を支配しようとする欲望、他者と共に他者のために生きる「努力」や「共働」の欠如などをすべて含み込む概念である。それらはすべて人間の「主体」と不可分に結びついている問題である。イエスは、「人の内部、人の心の中から悪い思いが出てくる」(マルコ七：二一)と言ったが、悪霊とは、そういう事柄をも含み込んだものである。梅本克己というマルクス主義者が、こういう展開をしていることが新鮮であった。多くのマルクス主義者たちが、梅本が展開したような事柄をまさに自分の事柄として、さらに深く追究していったのであれば、後に落ち込んだ荒廃も避けられたであろうと思う。とにかく、われわれは今こそ「現在の原罪」を克服するために、まず自分の内に、そして社会の構造に潜む悪霊の正体を見据えなければならぬと思う。そしてそれを物心両面において追い出し、物心両面の真の癒しをもたらすための現実的行動に参与しなければならぬ<sup>(4)</sup>。そういう実践こそが、現在でも「イエスに従う」ということを志す者たちに課せられている使命ではなからうか。

#### 8の注

- (1) 『イエスの原像(一)』の「2権威ある新しい教え」(五五頁以下を参照)。
- (2) 本論集の「レギオン追放」の項を参照。
- (3) 梅本克己『現代思想入門』(三一書房)。また拙著『イエスの根源志向』(新教出版社、一九七〇年)の「6永遠の罪」をも参照されたい。
- (4) 拙著『テキストとしての聖書』(社会評論社、一九九三年)の「働く喜びについて」の項を参照されたい。

## 9 神の意思を行なう者

『マルコによる福音書』三：三一―三五

31 イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。32 大勢の人が、イエスの回りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを探しておられます」と知らされると、33 イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、24 回りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。35 神の御心を行なう人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

この箇所は本来、三：二一―二二に直結するものであつたであろう。二二節は、『新共同訳』では、「身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になつている』と言われたからである」となつている。以前の口語訳では、「身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取り押さえに出てきた。気が狂つたと思つたからである」とされている。原文を直訳すれば、「そして、彼と共なる者たちは、彼を逮捕しようと思つた。なぜなら彼らは、彼が正気ではないと言つていたからだ」となる。この「彼らは言つていた」(エレゴン)は、不特定の複数の人々を指すとも読めるが、文脈からして、すぐ前に言及されている「身内の人たち」と取る方が自然である。それゆえ、古い口語訳のほうが正確な訳であると言えよう。『新共同訳』の訳だと、イエスのことを「気が変になつている」と言つているのは、イエスの身内の者たちではないことになるが、それでは『原マルコ』の身内や弟子たちへの批判的姿勢が読み落とされてしまう。『新共同訳』の訳者たちはイエスの身内の者たちが、イエスのことを「気が変になつている」などと語るのは、具合が悪いとも思つたのであろうか。このような訳は、マルコの批判的視点を意

図的にぼかしているときえ思えるのだ。実際、この二一節は、マタイやルカの平行記事においては、完全に抹消されてしまっている。イエスの身内の者たちが、イエスのことをこんなふうに通つていたというのでは具合が悪いと思つたのであろう。視点の違いは歴然として<sup>二〇</sup>いる。

このテキストのすぐ前には、そしてこの二一節の直後には、有名な「ベルゼブル論争」の記事があるのであるが(二二〜三〇節)、そこでは、「エルサレムから下つて来た律法学者たち」が、イエスのことを悪霊の頭かしらのベルゼブルに取りつかれていると中傷している。すでに述べたように、二一節は本来三一節に直結していたのであろうが、マルコは、二一節と三一節の間に、この「ベルゼブル論争」を挿入した。それは、イエスの身内の者たちがイエスのことを悪霊の頭に取りつかれていると中傷したことを同列に置いて強調し、両者を批判しようとしたからであらう。

さて、この「取り押さえる」(クラティン)という語であるが、それは後には、イエスの敵たちがイエスを逮捕しようとしてやって来たときにも用いられている言葉である(一一：一二、一四：一、四四、四六、四九)。マルコがイエスの身内の者たちの姿勢を批判しようとしていることが歴然と示される用法である。

三一節では、イエスの身内の者たちが「外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた」と訳されているが、ここには身内の者たちの冷ややかな態度が滲み出ている。彼らは群衆に近づくことを欲してはいないし、わざわざ人をやって呼び付けているのであり、きわめて高飛車な姿勢である。三二節では、身内の者たちがイエスを「捜している」とあるが、この「捜している」(ゼーテオー)という言葉は、捜し求める(seek)という意味の語であり、ほとんど「捜索」というニュアンスをも持つ。まるでイエスが「お尋ね者」(wanted)のように扱われているのだ。彼はまさにwantedだったのだ！

三二節の『新共同訳』は「大勢の人が」で始まっているが、この言葉は「オクロス」で、マルコが独特なニュアンスで用いている語であり、「群衆」と訳されるべきである。他の福音書では、この語はそのような特別な意味を持つものとしては用いられていない。マルコは、ガリラヤの貧しい民衆を特に念頭に置き、このオクロスという言葉を強調して用いているのである。だからこそ、身内の者たちが群衆に近付こうとしなかったということも、特別に強い意味を持つのである。

身内の者たちの姿勢に対するイエスの応答は、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と、きわめて突き放した態度である。これは、先の身内の者たちの態度と対照させる意図で選ばれた表現である。そしてイエスは三五節で宣言する。この節の原文は、「見よ！ わが母、わが兄弟！」と簡潔で鋭いものである。こここのイエスはガリラヤの貧しい群衆、「エルサレムから下ってきた律法学者」たちからは「罪人」と烙印を押されているような者たちを「見回して」そう宣言するのである。

三五節は、本来は独立した伝承であったのであろう。この節は、より原文に即して訳すならば、「神の意思を行なう者は誰であれ、その者こそがわたしの兄弟、姉妹また母である」とでもなるであろう（田川建三訳を参照）。マルコは、この伝承を、この箇所結びに置くことによって、「ガリラヤの貧しい群衆、母、兄弟、姉妹、神の意思を行なう者」という同定を主張したのであろう。これは実に斬新で、ユニークな同定である。

だが注意して見ると、これは奇妙な同定でもある。なぜなら、「神の意思を行なう者」という強調がなされておりながら、ここでの群衆は、イエスの前に座っているだけであり、特に何も「行なう者」といえないからである。それはまさに、「抑圧され侮蔑される状況のなかで、イエスに期待をかけて座している貧しく無力な民衆の存在そのもの」を指しているのだと言えよう。とすれば、マルコの視点は、こういう民衆との関わりにおいて、彼らと共に、彼らのた

めに生きるという生き方（病気を癒し、悪霊を追い出すという実践を共同で行なう生き方）こそ、神の意思を行なうことなのだということであろう。この視点を見失ってはならないのだ。

こういうマルコの視点をさらに明らかに見ていくために、他の福音書の並行記事を検討してみよう。

『マタイによる福音書』一二・四六～五〇の並行記事では、まずイエスの母と兄弟たちが、イエスに「話したいと欲して」とあるが、この「話す」（ラレオー）という言葉は、四六節でイエスが群衆に「話している」ときに用いられている動詞と同じである。つまり、イエスが神の子として民に語ると言う「説教調」の言葉が、身内の者たちの場合にも用いられるのであり、マルコの場合のように、彼らがイエスを「気が変になった」者として「逮捕」しようというのではなく、ずっと「品位」の高い言葉が用いられているのである。だからこそ、「イエスの気が変になった云々」の伝承が完全に抹消されるのだ。ここでの彼らの姿勢は、いわば「イエスにお話し申し上げたい」式の接近なのである。マルコの「人をやって呼ばせた」という冷やかな態度とはまさに対照的である。『新共同訳』が、「母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と訳しているのは、そのかぎりにおいて正しい。訳者たちの意図は、イエスに対する敬意という観点からのものであったであろうが、はからずもマルコとは違うマタイの姿勢を浮き彫りにしているからだ。

マタイのイエスが、マルコの場合と決定的に違うのは、四九節に見られるイエスの姿勢である。『新共同訳』では「弟子たちの方を指して」と訳されているが、原文に即して訳せば、「彼の弟子たちの方に手を差し伸べて」となっている。この方がずっと正しい。この「手を前に伸ばして」という表現は、神父や牧師たちが、手を伸ばして会衆を祝

福するときにするジェスチャーで、特別に権威ある聖職者が祝福を与えるときに示す宗教的典礼の際の身振りである。つまり、このイエスの姿は、弟子たちを宗教的・典礼的に祝福し、彼らを権威づける儀礼の執行者に変えられてしまっているのである。マルコではイエスは、周りに座っているガリラヤの貧しい群衆を見回して、彼らこそイエスの兄弟、母だ、神の意思を行なう者だという同定を示し、イエスが群衆と共にあるという姿勢を明示していた。ところがマタイでは、群衆は完全に無視され、弟子たちが祝福の対象とされているのだ！そしてさらに五〇節では、「天の父の御心」という荘重な宗教的用語が選ばれているのだ！マルコの視点との違いは明瞭であろう。

こういう方向は、後には聖職者という観念を生み出し、「按手礼」<sup>(3)</sup>という特定の宗教儀礼によって「使徒的権威」が世々にわたって伝承されるという観念が捏造されるまでになっていく。最後には、ローマ教皇が、一切の過ちから免れているなどという途方もない妄想が、「教皇無謬説」<sup>(4)</sup>という教義として制定されることになるのである！恐ろしい変質・変転である。

ルカの並行記事（八・一九〜二一）の場合はどうか。ここでは全体が以下のように実に単純化されている。19さて、イエスのところに母と兄弟たちがきたが、群衆のために近付くことができなかった。20そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。21するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行なう人たちのことである」とお答えになった。

ここでは、母たちが来たのは「お会いしたい」からとされている。「お会いする」(idain)という語は「お目にか

かる」というような、かなり丁寧な場合にも用いられるもので、マルコの場合のように、彼らがイエスを「取り押さえて来た」というのとは根本的に違うニュアンスである。それにここでは「群集のために近づくことができなかった」と述べられ、あたかも群衆は身内の者たちにとつて邪魔な存在でしかないようである。そしてさらに、マルコの「神の意思を行なう者」は、「神の言葉を聞いて行なう人」に変えられている。教説化の過程が一段と進んでいることが窺える。それに一読して明らかであるように、いかにも一般的・抽象的な叙述にすぎず、ほとんど一つの道德的命題にさえ響くのである。

『ヨハネによる福音書』には並行記事はないが、こうした教説化の行き着く果てとして、このテキストに呼応すると思える箇所がある。六：二八―二九である。

28そこで彼らが「神の業を行なうためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、29イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」

つまり、イエスは神から遣わされた「神の子、キリスト」であり、そのことを信じるのが「神の業」を行なうことと、救われることだという教義になっているのである。

ルカの把握の仕方から、こうしたヨハネの教義的把握へと宗教化されるのは、まさにあと一歩だと言えるだろう。この方向は、パウロの場合などではさらに徹底化される。例えば、『ローマの信徒への手紙』一〇：八―一〇である。

8b これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。9口でイエスは主であると公おおやけに言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。

こうして、マルコの視座は、きわめて急速に抽象化・教条化されていくのである。これが絶対化されたあかつきには、イエスを神の子として信じないことが「聖霊を冒瀆する罪」とされ、遂には「永遠に許されない責めを負う罪」(マルコ三・二九)という途方もない観念が生まれてくるのである。

9の注

(1) 新共同訳『新約聖書注解』も同意見である(一八二頁下を参照)。なお同書では、イエスの「身内の者たち」が語られる場合に、父親であるヨセフが言及されていないことに関して、「イエスの活動の時にはすでに父親が死んでいたからであろう」と述べられている(一八三頁下)。おそらくそうであろう。またそこでは、イエスの「兄弟たち」に関して、古来伝えられてきた三通りの解釈が紹介されている。①ヨセフとマリアの息子たち(テルトゥリアヌス、ヘルヴィディウス)、②ヨセフと先妻の息子たち(エピファニウス。なお『ヤコブ原福音書』九・一―三を参照)、③イエスの従兄弟たち(ヒエロニウス)である。そして②と③は、「マリアの終生処女性の思想と関連している」と述べられている。おそらくそうであろう。「神の子」イエスの母が、イエスの誕生後は処女でなくなるというのでは困るわけで、こういう無理な解釈が考え出されたのであろう。もっとも『マタイによる福音書』一・二五では、ヨセフが、「男の子(イエス)が生まれるまでマリアと関係することはなかった」と書かれており、イエスの誕生後は性的関係を持ったことが明記されているのであるが、それにもかかわらず、護教論的思考とはそういう捏造をすら生み出すものなのである。

(2) このテキストについては、『聖書を読み直す I』の第二章の4「神の意思」において詳述しておいたので、参照されたい。

(3) これはラテン語の *ordinatio* の訳であるが、元来はローマ教皇がその座から下級の聖職者の頭の上に手を置くと、「初代の教皇」であるとされたペトロ以来の「使徒的権威」が具体的に伝承されるという儀式であった。カトリック教会では「叙任」とも訳される。プロテスタント教会でも、正規の牧師の任職に際して現在でも行なわれている儀式であり、「准允じゆんいん」と訳される。こういう「秘跡」(サクラメント)の概念の問題性については、拙著『宗教幻論』の一五九頁以下を参照されたい。

(4) ラテン語で *infallibilitas* と言う。教皇が、宗教と道徳に関して「教皇の座から」(*ex cathedra*) 語るときに無謬であるという教義。

## 10 蒔かれた種

『マルコによる福音書』四：一〜二〇

1 イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群集が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群集は皆、湖畔にいた。2 イエスはたとえていろいろと教えられ、その中で次のように言われた。3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が蒔時きに出て行った。4 時いている間に、ある種が道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこには土が浅いのですぐ芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかつた。8 また、ほかの種はよい地に落ち、芽生え、育つて実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十にもなった。」9 そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

10 イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。11 そこで、イエスが言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえて示される。12 それ

は、

「彼らが見るには見るが、認めず、

聞くには聞くが、理解できず、

こうして、立ち帰って赦されることがない」

ようになるためである。

13 また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。15 道端のものと、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16 石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17 自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起ると、すぐにつまづいてしまう。18 また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、19 この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。20 良い土に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

この箇所は、「種を蒔く人のたとえ」(一〇〜九節)「たとえで話す理由」(一〇〜二節)、「種を蒔く人」のたとえの説明」(一三〜二〇)という三つの部分から成っている。

一〜二節は、マルコの編集句と見なされている。ここでは「おびただしい群衆」がイエスのそばに集まってきたというマルコ独特の表現が顕著である。この群衆の強調は、マルコにおいては、「たとえを理解できない弟子たち」(一〇〜一三節)との対比として意識されているのであろう。

さて、譬えというものは、何かを明らかにするための例証として用いられるものであるが、三〜九節までの譬えには、その何かが述べられていないので、ここだけではこの譬えの意図が分からない。そのため、一五〜二〇のような

「説明」が試みられるようになったのであろう。この「説明」は、マルコの周辺で広まっていたのかもしれない。

一一〜一二節は、弟子たちについて残されていた別の伝承であろう。当時すでにエルサレム教会において指導的地位についていた「弟子たち」は、自分たちはそもそもイエスの「直弟子」であり、特別に選び出された「使徒」であり、それゆえ他の者には与えられなかった「秘伝」を受けており、従って「権威」を持っていたと主張していた。これは、彼らのそういう自負・誇りが伝承化されたものであろう。この伝承にマルコは一〇節を書き加え、そうした「特権的な」者たちとして、「二人と一緒にイエスの周りにいた人たち」を挙げる。これはきびしい批判とも読める。以前に二人が「使徒」として選ばれたのであるが（三・一三〜一九）、その彼らはもちろん、さらに彼らの周りにいた人々までが、「お取り巻き」よろしく「使徒」たちの「権威」に寄りかかりながら、彼ら以外の人々を「外の人々」などと呼ぶようになってしまっている。そのうえご丁寧<sup>おとし</sup>に旧約聖書からの引用までして、「外の人々」を貶め<sup>おとし</sup>ているのだ。

これに対してマルコは、一三節を挿入している。「君たちこそ理解していないではないか。それでは、どうしてすべての譬えが分かるなどといえるのか」（田川建三訳）と。これは、明らかに「使徒」たちへの断固たる非難であり批判である。

『マタイによる福音書』の並行記事（二三・一〇〜一七）は、このマルコの姿勢とは全く違う。まず弟子たちがイエスに近寄って「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話になるのですか」と問う。ここではマルコでいわれた「二人と一緒にイエスの周りにいた人々」が排除され、弟子たちだけに限定されている。ここで、そつとイエスににじり寄って、ひそひそとイエスに質問する弟子たちのイメージは、いやらしく陰険である。その弟子たちにイエ

スは言う。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる。だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである」と！ この「持っている者は云々」（一二節）は、本来まったく別の伝承であつたであろうが、こういうものまで援用して、弟子たちの特権を強調している！ そしてさらにダメ押的に「イザヤの預言は、彼らによつて実現した」とまで宣言するのである！

これでは、弟子以外の人々は、ほとんどみな断罪されることになってしまふ！ そのうえ弟子たちには、一六〇一七節の何とも特権的な祝福が与えられる！「しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ。はつきり言つておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかつたが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたがつたが、聞けなかつたのである」！ そして、マルコが一三節で書き加えた弟子たちへの批判や非難は、マタイの場合にはもちろん削除されてしまつている！ マルコとの視点の違いは、見紛うべくもないであらう。

『ルカによる福音書』の並行記事（八・九〇一）は、マタイに見られるこうした「えげつない」ほどの弟子賛美に辟易したのであろうか、それを全部削除している。もつとも、ここで登場するのは弟子たちだけに限定され、マルコの一三節も削除されているのであるが。そしてそのことは当然、ルカがマルコの意図を理解していないことを示しているのである。

さて、この譬えの解釈であるが、古来キリスト教会はこれを「神の国」についてのたとえであるとしてきた。それはマルコ四・一四の「種を蒔く人は、言葉コトバを蒔くのである」の解釈に関連する。日本語訳では、「神の言葉」となつ

ているが、原文には「神の」がない。原文にないのにこういう付け足しをするべきではない。「神の言葉」というのと、ただ「言葉」というのでは、根本的な違いがある。すでに訳者の思い入れを付け加えているのだ。とにかく、教会がこの譬えを「神の国」の譬えと解釈してきたのは、マルコでは「言葉」が蒔かれるとあるのに、マタイのほうでは、「御国の言葉」が蒔かれると変えられていて（二三・一九）、しかも後の教会が新約聖書正典を定めたときに、一番古い『マルコによる福音書』を最初に置かず、「正統的解釈」をする『マタイによる福音書』を筆頭に置いたので、読むほうがそれに引きずられてきたからである。なぜマタイが、そのように変えたかという点、マタイは、マルコの「言葉」という表現の意味を理解しなかったからであり、また、マルコの「成長する種のとえ」（四・二六～二九）と、「からし種のとえ」（四・三〇～三三）で、「神の国」が語られるので、「種を蒔く人のたとえ」もすべて「御国」（天国）についての譬えであろうと受け取ったからであろう。そしてマタイは、それらのたとえを全部「天国」（神の国）についての譬えとして、一三章に集めたのであろう。

田川建三が言うように、三～八節の「種を蒔く人のたとえ」は、元来、蒔かれた種にはいろいろなことが起こるが、結局は大きく育つのだというだけの主張であつたかもしれない。前述したように、そもそも何をたとえようとしたのか分からないのであるから、本来の意味は不明なのであるが、そういうことであつたかもしれない。それにしても、一節ではマルコ独特の「群衆」ということが強調されているのであるから、この種が群衆の間に蒔かれると、いろいろ邪魔が入るかもしれないが、最後には大きな実を結ぶようになるのだという確信を述べたものであつたかもしれない。しかし、それが本来の意味であつたかどうかを確認する手立てはない。

いずれにせよ、この譬えを聞く者は、「自分はこういう地であるか」という反省をするであろう。そこで、一四節

以下のような「説明」が生まれてきたのであろう。

さて前述したように、一四節ではいきなり「種を蒔く人は言葉ロゴスを蒔くのである」と告げられる。このロゴスという言葉の用法は、「絶対用法」といわれるものであり（田川建三）、一・四五、二・二二において見られるものである。それはまた、一・二一の「教え」、一・二七の「権威ある新しい教え」とも重なるものであり、また一・三八の「みんなで行って宣べ伝えよう……」といわれる場合の内容でもある。すでに詳述したように、マルコのいう言葉ロゴスは、パウロ的な「宣教の言葉ロゴス」に意識的に対抗するもので、イエスが、硬直した律法主義を否定し、民衆の苦しみを具体的に取り除く行為（病氣癒しや・悪霊・汚れた霊の追放）をしたように、「みんなで」こういう行為に参与しようという訴えである。これがマルコの言葉ロゴスに独特な内容なのである。これに日本語訳のように余計な「神の」を付け加えて「神の言葉」としたり、「御」という字をくつつけて「御国」などとするのは、すでに教団的ドグマティズムに支配されているがゆえに起こってしまう歪曲であるといえよう。

マタイは、この譬えを「御国の言葉」を聞いて「悟る」か否かという「信仰」的解釈へずらしてしまう。そういう方向は、「だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い去る」（一九節）という表現に端的に表われている。この「悪い者」という解釈は、すぐその後の「毒麦のたとえ」（二四〜三〇）に典型的に見られるような教団的解釈に結び付く。そして、「心の中に蒔かれた」というマタイ的表現は、マタイ独特の内面化・宗教化を示している。それは、本来端的に「幸いだ、貧しい人々は」（ルカ六・二〇）という激しい逆説的怒りがこめられた表現を、「心の貧しい人々は幸いだ」（マタイ五・三）という内面化された宗教性に変えてしまっ

た発想と同じである。だからここでもマタイにおいて、「天国についての言葉」を聞いて、「悟る」か否かが中心主題にされてしまうのである。マルコとの違いは歴然である。

ルカの場合はどうかというと、種はまず「神の言葉」とされる(八・一一)。そして、それを「信じて救われる」かどうか(一二節)、「しばらく信じても……身を引いてしまう人」(二三節)などが中心主題になる。その文脈のなかでは、一五節の「善い地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して身を結ぶ人たちである」というのも、キリスト教信仰を受け入れ、それを信じて、しっかり守り通すかどうかという内容になってしまっている。マルコの視点などまるで見えていない。

このようなマタイやルカの解釈には、自分たちはすでに正しい「信仰」を受け入れ守っているという姿勢が明瞭であり、自分たちこそ「真理」の保持者であるという自負があり、それによって他者を評価・判定しようという態度がうかがわれる。真面目といえれば真面目であるが、本質的に傲慢な姿勢であるというほかない。

マルコにおいては、言葉は、イエスの生き様全体による訴えであり、その言葉を聞く者たちが、みんなでイエスのように生き行動することを促しているのである。つまり、イエスがアツバー(父ちゃん)と呼んだ「神」への端的な信頼において生き、民衆の苦しみを具体的に克服する行為をしていたように、イエスに従いつつ、イエスと共に、そういう生き様と行為を追求することが促されているのである。イエスとそうに出会い、イエスのような生き様と行為を実践していくならば、その結果は、三〇倍、六〇倍、いや一〇〇倍にもなるのだという希望が、ここには躍動している。そういうメッセージならば、現代においてもわれわれに訴えかけてくるものであり、われわれの自己吟味を促し、そして現代でもなお失われぬ希望の灯を示すものでありえよう。まさに「聞く耳ある者は聞くがよい」である。

- (1) 『イエスの原像』(二)の「2権威ある新しい教え」を参照。  
 (2) 田川建三『イエスという男』六〇頁以下の「(8) 貧しい者は本当に幸いか？」を参照。

## 11 言葉の位相

『マルコによる福音書』四：二二～二五

21また、イエスは言われた。「もし火を持って来るのは、<sup>ます</sup>升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためでないか。22隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、<sup>おおよげ</sup>公にならないものはない。23聞く耳ある者は聞きなさい。」

24また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量<sup>はか</sup>る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。25持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

このテキストは、マルコの編集というものがどういうものであるかを実に面白く例示してくれる箇所である。それだけにこの箇所は、前後の文脈のなかで理解することが絶対に必要である。この箇所は、言葉というものが、前後の文脈でどのようにその意味を変えてしまうかをよく示している。言葉は、どういう位相に置かれるかで、恐ろしいほど意味や機態の違いを生み出してしまうのである。

まず二二節からみてみよう。四・一〇～一二に伝承されている「弟子たち」の閉鎖的で権威的な姿勢を思い出してもらいたい。そこでイエスは、弟子たちと周りの者たちに対して言う。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される」と。これに対して、マルコが「このたとえが分からないのか。ではどうしてほかのたとえが理解できるのだろうか」（二三節）を挿入して、弟子たちの無理解を批判した。そのことについては、すでに詳しく述べた。<sup>(1)</sup> そういうマルコの視点に対して、マタイは、またぞろ弟子たちに特権的・権威的な地位を与えるようにマルコを変えてしまったのだが、それについてもすでに述べた。<sup>(2)</sup> マルコは、すぐ後の箇所でも同じような伝承を伝えている。そこでも、「イエスは、人々の聞く力にに応じて、このように多くのたとえで言葉を語った。たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された」（四・三三～三四）とある。こういう伝承の姿勢に対してマルコは批判的姿勢を対峙させるのである。「ともし火は、升や寝台の下に置いて隠しておくものではなく、燭台のうえに置いて皆に分かるようにするのだ」と！ なんて弟子たちは、自分たちだけが秘密を知っているなどと思いつがるのか？ すべての人に知らせたらいいではないか！

マタイでも、この「ともし火」の伝承が述べられている（五・一三～一六）。しかしそれは、「あなたがたは地の塩、世の光である」という文脈のなかで語られている。だから「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行ないを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」と結ばれるのだ。そこにあるのは、宣教の勧めであるし、「立派な行ない」の勧めである。マルコの位相とは本質的に違う。

ルカにも、「ともし火」についての伝承がある（一一・三三～三六）。しかしここでは、「からだのともし火は目で

ある」という文脈のなかで語られている。ルカのイエスは言う。「もし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。あなたがたの体のもし火は目である。目が澄んでいけば、あなたの全身が明るく、濁っていけば、体も暗い。だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、もし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている」と。ここでは、内なる光を暗くするな、内面の光を明るくせよ、という宗教的・道徳的勧めの言葉が語られているのである。マルコの位相との違いは言うまでもあるまい。

このように、言葉というものは、どういう文脈で語られるかで、まるで違う機能を果たすものなのである。

二二節はどうであろうか。この「隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない」という言葉も、マルコの文脈においては弟子たちの権威主義的秘密主義に対して、ほとんど威嚇的とさえ響く表現で批判しているものである。「弟子たちが、特権的に秘密を知っている者として、その秘密を隠しておこうとしても、そんなことはいずれ知られるようになるのだ。そもそも隠そうとすること自体がおかしいのだ。しかも、たとえの意味もわからないくせに……」。そういうのが、マルコの批判的姿勢である。だからこの節は、よく教会で解釈されるように、終末の時の審判であるとか、神の国についての神秘などということではないのである。

マタイも、これと似た伝承を知っている。「人々を恐れてはならない。覆われているもので現わされないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。わたしが暗闇であながたに言うことを、明るみで言いなさい」(二〇：二六～二七)。マタイの文脈は、「主人(イエス)がベルゼブル(悪魔の頭)だと呼ばれるのな

ら、弟子たちはもつとひどくいわれるだろう。しかし恐れるな。神様はすべてお見とうしだ。だから恐れずに宣教せよ」ということである。マルコの言わんとすることはまったく違うのだ。

ルカでこの伝承（一二・一―三）が扱われる方向は、また違う。「1とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。『ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である。2覆われているもので現わされないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。3だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にさやいたことは、屋根の上で言い広められる』。ここでの文脈は、「ファリサイ派の連中の偽善に気をつける。いまに彼らの偽善が暴かれるときが来る。弟子たちの語ったことは、いまにすべての人々に明らかになる」というものである。もつとも、ここでもイエスが「まず弟子たちに話し始め」とあつて、弟子たちに特別な位置とか權威とかを与えられているような書き振りをしており、それに対して何も批判的姿など示してはいないのであるが。いずれにせよ、マルコの視点とはまったく違うものである。

マルコは上述のように二―二二節で、弟子たちの秘密主義的な姿勢に対する批判を展開し、その上で今や二三節において弟子たちにも、そして読者にも問いかける。「聞く耳のある者は聞きなさい」と。これまでの論述によって、その方向がどういふものであるかはすでに明らかであろう。

それに対して、マタイにおいてこの同じ表現が用られているのは、「洗礼者ヨハネは、終末時に再来するといわれ

ていたエリヤにすぎず、イエス（＝キリスト）の先駆者にすぎないのだ。イエスこそが、約束されていたメシア・キリストなのだと悟れ」という文脈においてである（一一・二〇―二一・一五）。一三・四三でも、「耳のある者は聞きなさい」という表現が用いられているが、ここでは、毒麦のような悪い者が審判を受け、地獄で苦しみを受けることが述べられ、それを警告する言葉として用いられている。同じ言葉が、それぞれどのような文脈のなかで用いられるかによって、実に様々な意味と機能を持つものになることが明らかに見てとれるであろう。

こうしてみると、このテクストの二四節の言葉も、この文脈のなかで読むと、弟子たちへの批判であることが明らかになるであろう。「また、彼らに言われた。『何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる』。これは「他人を裁く同じ尺度で自分も裁かれるのだ、だから他者を裁くな」ということであり、マルコの文脈においては、弟子たちに向かって「人々の上に立ち、権威者や支配者のように思い込み、高ぶった振る舞いをするな」という批判であり、警告である。

マタイもこの伝承を伝えているが（七・一―一五）、そこでの主題は一般的に「他者を裁くな」という教訓である。「人を裁けば自分も同じ秤で裁かれる。他人の目のなかのおが屑には気がつくのに、自分の目のなかにある丸太には気がつかない。まず自分の目のなかにある丸太を取り除け」という道徳的教えである。マルコの場合のような弟子たちへの批判という視点ではない。

ルカの場合にも、やはり「人を裁くな」という文脈で伝承されている（六・三七―三八）。ただルカでは、「他者を

赦してやれ、そうすれば自分も裁かれぬ」というルカ的な付加がなされているが、つまりそれは、「慈悲深い神のように他者を赦してやれ。そうすれば自分も裁かれることはない」という一般的・抽象的な道徳的説教になっているのだ。そこにマルコの視座が見られないことは言うまでもない。

さてマルコは、二五節の「持っている人は更に与えられ、もっていない人は持っているものまで取り上げられる」という本来別の伝承であったものを、このテクストの最後に置く。だからこの節は、二四節との関連においてのみ、それも最後の「更にたくさん与えられる」という表現に繋げてのみ理解されるべきものである。さもなければ、この文脈のなかで、この二五節は何の関連もなく、意味不明なものになってしまう。マルコが、この言葉を付け加えたのは、弟子たちに加えられる裁きは、他の人たちの場合より、さらに重いものになるぞ、という威嚇であったかもしれない(田川建三)。実際、そうとでも理解しなければ、この言葉の意味は分からないものになってしまう。

同じような伝承をマタイは、弟子たちには、神の国の秘密が知らされるといふ文脈で用いている(一三・一〇〜一三)。そこでイエスは弟子たちに言う。「あなたがたは天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちは許されていないからである。持っている人たちは更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる」と！つまり弟子たちは、他の人々とは違って、神の国の奥義が知らされて、ますます豊かなものになってゆくが、他の者たちはさらに貧しくなってゆく、というのだ！こうして弟子たちの権威はますます高められる！ どう見ても不公平である。マタイの視座は、マルコのそれとまさに正反対である。

同じ伝承が二五・二九でも用いられているが、それは有名な「タラントのたとえ」のなかである。つまり、そ

これは主人から預けられたタラントンを活用しなかった者に対する断罪として用いられるのである。これはもちろんマルコの視座とは違う。

ルカもこの「持っている人は々々」という伝承を伝えているが（一九：二六）、ここでもそれは、王から与えられた一〇ムナを活用しなかった者への断罪の言葉として用いられている。まったく一般的な道徳的教訓にすぎない。

以上のように「共観福音書」と呼ばれている三書を比較検討してみると、その「共観性」なるものが実に大きな問題を孕んでいることが明らかであろう。そして、同じような言葉でも、それがどのような文脈のなかに置かれるかによって、どれほど違った意味と機能を持つものに転化してしまうかも知れなくなったのであろう。だからわれわれは、言葉をどのような位相で理解するのかを深く問わねばならないのである。

昭和天皇死去直前のクリスマスが近付いた順、『横浜上原教会週報』に、「何事があってもクリスマスを行なう」という「クリスマス委員会」の「決意表明」が載っていた。私は、この週報を見ていろいろなことを思った。こういう言葉も、どういう位相で語られるかによって、いろいろな意味を持つようになり、さまざま機能を果たす。少なくともそこには二つの位相があると感じさせられた。一つは、Xデーを念頭に置いての意味である。つまり、全国的な「自粛ムード」のなかで、断じて「クリスマス祝会」を止めたりはしないという位相である。そのような位相で読めば、この「決意表明」は、Xデー攻撃をはね返す機能を果たすものとして、積極的な意味を持つ。世の中では、クリスマスというのは、ただ何だか楽しいパーティーぐらいに思われているのであるから、「祝会」をやめないという

は、「自肅ムード」への抵抗として評価できる決断である。

もう一つの位相は、クリスマスというキリスト教会の行事が、歴史的に吟味してみると、いかに多くの問題性を孕んだものであるかという指摘がなされ、従来のクリスマス祝会など抜本的に検討されねばならないという提案がどれほどなされても、「これは伝統的な行事なのであるから、どのように批判されようと断固として行なう」と言つて、一切の批判に耳も貸さない態度の表明という位相である。同じ言葉でも、そのような位相で語られるならば、その機能はまったく別なものになつてしまふ。

私は、「クリスマス」に対する批判を長年にわたつて繰り返してきた<sup>(3)</sup>。歴史的に検討すれば、例えば一月二五日という日付に何の根拠もないことは明らかである。唯一の由来は、昔ローマ帝国内で隆盛をきわめたミトラス教の太陽神の誕生日として民衆の間で抜群の人気のある冬至祭の日が、一月二五日であつたものを、キリスト教会が乗っ取るために、この日を「イエス・キリストの降誕日」と定めたことである。それが最終的に教会会議で決定されたのは、八世紀も終わりになつてからのことである。だから、この日付けには、重大な虚偽と陰險な策謀が潜んでいる。だが「その時以来、長い年月にわたつて教会の伝統になつたものだから、その日付にもうごだわらなくてもいいではないか」という意見もある。そういう「理屈」に依拠するならば、二月一日を「建国記念の日」とすることに反対する必要はないという「屁理屈」も、あなたがち否定できないことになりえよう。キリスト教会が「建国記念の日」に反対するかぎり、こういう点まで自己批判を遂行しないのであれば、他者を批判することもできないであらう。

かつてある牧師が、「世の中ではクリスマスの本当の意味を知らないままに、それをただ楽しい時として祝つているが、それでもクリスマスは有意義である。なぜなら、とにかくそれは楽しい時であると思われていることにおいて、

イエス・キリストの誕生が人類にとつて喜ばしい出来事なのだとすることを証<sup>あかし</sup>しているからである」と語ったのを聞いたことがあるが、ずいぶんとひどい発想であると思う。そこにはクリスマスなるものの歴史的問題性の認識はおろか、それが商業主義の波に乗せられたものであるとの認識もなく、どんな形であれキリスト教の宣伝に役立つのであれば歓迎するという何とも安手の「伝道主義」しかない。

「クリスマスには夢がある」とか、「とにかくお祭りは楽しいのだから、いいではないか」というような意見には、それなりの意味もあると思うが、なぜクリスマスが多くの人々に好かれるのかということについても、もつと深い吟味が必要であると思うし、それがどのような形で継承されるかについても突っ込んだ議論がなされるべきであると思う。そのことについては、すでに別のところで論じておいたので今は詳論しないが、もはや安易な、そして安手の「クリスマス防衛」を繰り返していい時代ではないであろう。「クリスマス信者」という言葉がある。普段は教会に出席しないが、この季節だけは、そのムードに浸るために出席する「信者」のことである。クリスマス・ページェントや、キャンドル・サービス、サンタクロースなどに、異国情緒豊かな懐かしみなどを感じるからなのであろうか。そして教会は教会で、この季節を機に、「求道者」たちに洗礼を受けるように勧める。ムードを利用しての、一種の「経営主義」の臭いを感じざるをえない。だからこそむしろ、根本主義的な教会では、クリスマスは「聖書的」でないとして、断固それを否定するのである。そして「せめてキリスト教会では、クリスマスなどという馬鹿騒ぎを止めましょう」という「真面目な」提案がなされるのである。いずれにせよ、根本的な吟味がなされる必要がある。

私は、一年の終わりに臨んで、とにもかくにもまた一年の間、健康を維持できて生きてこれたことを素直に喜び、友人たちと楽しい時を持つことには大いに意義があると思っている。そうした観点から見ると、冬至という古い祭に

は、長い年月にわたる民衆の思いが込められていると思う。それに、この日から太陽の光が一日ごとに長くなるというのも、希望を感じさせることである。そうしてみると、一年の終わりに臨んでの祭としては、誰とでもその喜びを分かちあえるものとして、「冬至祭」とでも呼べばいいのではないかと思う。それは、少なくとも北半球の人々にはすべて妥当する。「冬至」は、英語では「ソリスティス」であるが、「国際的」にするのであれば、「ハッピー・ソリスティス」とでも挨拶を交わせばいいのではないかと、結構本気で考えている。「そんなややこしいことを考えずに、日本には忘年会という面白いお楽しみがあるのだから、それでいいではないか」と言われるかもしれないが、「その年を忘れる」という姿勢はあまり感心しない。それでなくとも日本人は、いろいろ忘れっぽくて困るのである。良いことも悪いことも、あまり簡単に忘れないほいほいがよい。捻<sup>ひね</sup>くれていると思われるかもしれないが、われわれの自己批判は、こういうところまで及ばなければいけないと、私は思うのである。

いずれにせよわれわれは、どういう言葉を用いる場合であれ、それが、どのような位相で用いられるのかによつて、非常に違う意味を持ち違った機能を果たすものになることに、心をとめたほうがいいと思う。どういう視点から、何を目的として言葉を語るかを、常に深く鋭く吟味したいものである。まさに「聞く耳ある者は、聞くべし！」である。

## 11の注

(1) 前節「10時かれた種」を参照。

(2) 『聖書を読み直す I』の第二章の「4神の意思」の項、および本論集の「9神の意思を行なう者」の項を参照。また、「共観福音書」の「共観性」の問題については、拙著『キリスト教史I』、七九頁以下の「共観福音書」の項を参照された。

- (3) 本論集の「福音の初め」の注(6)(7)を参照。  
(4) 拙著『キリスト教史I』、二五八頁以下を参照されたい。